ISSN 1344-5715

Bulletin of Tokyo Kasei Gakuin University Library

東京家政学院大学 図書館報

平成24年3月8日　第58号

発行者　東京家政学院大学
附属図書館
〒194-0292 東京都町田市
相原町2600
電　話　042(782)9815
印刷所　(株)栄文舎印刷所

「ラーニング・コモンズ」のすすめ

天野　正子

いま、大学図書館がおもしろい。「おもしろい」という言葉が不謹慎なら、こういいかえてもよい。いま、大学図書館は大きく様変わりしている、と。

これまでの過去の知識の収蔵庫という、いわば「うしろむき」の役割から、文字通り、「考えながら調べ、調べながら考える」ために、あるいは「考えたことを伝えあう」ために、学生、教職員が集ってくる「ラーニング・コモンズ（学びの共有地）」への転換である。コモンズとは、誰にでも開かれた自由な空間を意味する。

私が学生や院生の頃、大学図書館は「知の殿堂」や「大学の心臓」などと美辞麗句で呼ばれ、気楽に出入りする空間ではなかった。それにあの頃、大学図書館はキャンパスの中央に位置し、講義棟から遠かった。ところが

今、多くの図書館はアクセスのよい場所におかれている。本学の場合は食堂からの至近距離にある。

こうした大学図書館の変容は、大学それ自体の機能の変化に対応している。インターネットで多くの情報がデジタル化され、資料を保存し提供するという、図書館の本来の機能は縮小しつつある。それに代わって大学全入時代の図書館には、大学のミッションや教育目標の達成にむけて、学生の学習支援にどれだけ有効に機能できるかが問われるようになった。

本学が重視しているのは、入学時の偏差値ではない。四年間の学士課程で学生一人ひとりの関心や意欲、能力を引き出して伸ばし、付加価値をつけて社会へ送り出す、いわば卒業成長値を高める教育である。現代社会のさまざまな生活課題を解決し、新しい生活の提案者を育てるという本学のミッションからするとき、現代生活学部の五学科に共通する教育の課題は、一つにしぼるなら、「課題探求能力」の育成ということになる。

それが含意しているのは、大切なのは知識を与えることではなく、獲得した知識を通して学生自ら問題を発見し、探索し解き明かしていく能力を身につけることである。そのために必要なのが、学生の自発的な学習意欲である。学習意欲があれば知識は獲得できる。そこから、学習意欲を高めるような、知的にチャレンジングな、学習環境としての図書館の役割が浮上してくる。

一人ひとりの学生が多様なメディアを通して得られる情報や知識の洪水の中で、必要な情報を取捨選択し、何が重要な情報や知識でありそこから何が分かるのかを、教員と学生、学生同士が議論を交わしながら、学びを深めていく。

大きな変化の時代には、過去の延長上で問題を解決するのはむずかしい。新しい状況の理解に、情報は欠かせない。そのための物理的な場所と人的サポートの場としての図書館――。図書館新時代の教員には、学生たちを学習に誘引するのに魅力的な仕掛けをつくってほしい。学生との対話を重視する双方向型授業の過程で課題探索への動機づけを与え、教員と学生、学生同士の対話型や討論型の場として、図書館をフル活用してほしい。

図書館職員には、学習に必要な「情報の提供」に安住せず、学生が必要な情報に適切かつ効率的にアクセスし、それらを評価し取捨選択しながら活用する「情報を使う力」を中心に、「学びのマネージメント」を体得していく過程に関わっていただきたい。肝心の学生のみなさんは、調べることであいまいだった知識が明確になり、自分の考えを発表して質問を受けることで視野が広がる喜びを経験してほしい。

そこから大学図書館は、ラーニング・コモンズに生まれ変わる。

（本学　学長）

第五十八号　目次

「ラーニング・コモンズ」のすすめ　天野　正子
旅　出会いと別れ　長谷　徹
『在宅療養をささえるすべての人へ』　松田　正己
日本橋美人博覧会に協賛参加のお話　有泉　治
『マイ・フェア・レディ』と KVA精神　畝部　典子
本学教員寄贈図書紹介
卒業式に見る人生曼陀羅　小野塚久枝
月刊　やさい通信
『狭衣物語　空間／移動』　井上　眞弓

旅　出会いと別れ

長谷　徹

『月日は百代の過客にして、行かふ年も又旅人也。』ということで、学生の頃から〝旅〟を生き甲斐の一つとして今日まできました。

学生時代、下北半島を旅したとき、その出発点である野辺地駅でローカル線に乗ったときのことでした。私の目の前に座ったおばあさんが、何か私に話しかけてきます。何を言っているのかわかりません。黙って聞き逃すのは失礼と思い、ニコニコしながらおばあさんの話を聞いていました。だんだん話を聞いているうちに、同じことを繰り返していることがわかってきました。時折「たばこ」という言葉が聞きとれるようになりました。そのうち、私の胸のポケットを指さし始めました。そこにはたばこが入っていました。おばあさんは「今、私は持ち合わせがないが、あんちゃんたばこを一本くれないか」ということを言っているのだということがやっとわかりました。「ごめん、ごめん」と言って、たばこに火をつけてあげました。にこっと笑って、お礼を言っているのがわかりました。野辺地を出て三〇分ほどでおばあさんは降りていきました。その間ずっと話しかけてくれました。何とか、東京から来た学生で、これから恐山に行くのだと言うことは通じたようでした。後はおばあさんが何をお話ししてくれているのかわかりませんでしたが、一生懸命に話しかけてくれていたということはよくわかりました。旅の楽しさの一つが、旅先でその土地の人と出会って、コミュニケーションをとれることだと思っていましたから、十分なコミュニケーションはとれませんでしたが、何か心がほっとするのを感じた人との出会いでした。

三十歳の頃に北海道を旅し、根室の町の旅館に一泊したときのことでした。泊まっているのが私たちだけということもあったのか、食堂でお酒を飲みながら夕食をいただいているとき、女将さんが脇に来て、いろいろと話しかけてきました。東京で教師をしていることや北海道の旅の思い出などを語っていたところ、女将さんが「実は私は国後の生まれなんです。」と語り始めました。国後の村での生活や自然の様子など、懐かしそうに語っていました。しばらく国後の話が続いたあと「もう帰れないんですよ。」と言って涙をこぼしながら国後から離れるときの様子やその後の生活のことなど語ってくれました。心の底にずしんと響くものがありました。楽しい出会いと言うよりは、心に重いものが残った出会いということにでもなりましょう。今でも、北方領土のことがニュース等で流れると、あの晩のことが鮮明に思い出されます。

旅をすることに心がひかれるのは、未知の土地の自然や人々の暮らし、社会などに直接触れるというところにあると思います。できる限り出かけた土地の人たちと会話をすることを心がけています。人間が大きくなっていくような気がします。また、何回か訪れた土地であっても、行くたびに新しい発見や出会いがあります。それも楽しみの一つです。また何回か訪れるうちに顔見知りになってしまうといったこともあります。知人が増えてくるということもあります。

私にとって京都は、何回訪れてもまたすぐに行きたくなる土地です。

大学一年生の春休み、数人の友達に誘われて京都に出かけることになりました。みんなはユースホステルの会員で宿が決まっていました。私は「行けば何とかなるだろう」というまったくめちゃくちゃな考えをもって出かけました。

当時走っていた寝台急行〝銀河〟で東京を発ちました。翌朝京都に着きます。その日は、京都大原に行こうということでしたので、駅前からバスに乗り大原に向かいました。三千院を参観し、寂光院に向かいました。寂光院の参拝もすんで市内へ帰ろうと寂光院からバス停に向かって歩いているときでした。同行の仲間が「あそこの茶店で少し休んでいこう」ことになり、茶店に入りました。おばさんが一人で店を切り回していました。「これは菜の花漬け、これは有名なしば漬け」といろいろな漬け物を出してくれました。会話も弾みました。何気なく「私、今夜の宿が決まっていないんだけれど、この近くで泊まれるようなところはありませんか」と聞いてみました。おばさんが「店の前の民宿に聞いてきてあげよう」といって小走りに茶店の前の民宿に行ってくださいました。戻ってくると「残念だけど今日は予約でいっぱいだそうですよ」ということでした。やはり宿を決めずに来てしまったことは無鉄砲だったかと考えていると「井上さんちが前にも人を泊めたことがあったから、ちょっと聞いてみてあげる」と言って電話をかけてくださいました。しばらくすると戻ってきて「大丈夫だそうですよ。行ってごらんなさい」ということで、仲間と別れて、その紹介していただいた家を訪ねてみました。訪ねてみると、おばちゃんが出てきて「こんな農家だけど、ここでよかったらどうぞ」ということで、自分のことを紹介しながら、その日泊めていただくことになりました。

居心地がよく、結局そのときは三泊してしまいました。お風呂は所謂〝五右衛門風呂〟でした。寒いときなど、母屋からいったん庭に出て、お風呂のある小屋に向かいますが、すぐには湯船につかれないので、結構きつかったことを覚えています。食事は、家族と一緒に食べました。おじさん、息子さんとむすめさんの四人家族でした。息子さんとは歳もそう違わないのでよく話をしました。この日からこのおばちゃんの家とのおつきあいが始まりました。

休みには必ずと言っていいくらい京都大原に出かけました。そしておばちゃんの家に泊まらせていただきました。朝食時には、生卵がだめな私のために、焼いたりゆでたりしてくだ

さいました。教員としての就職が決まったときには、我がことのように喜んでくれました。五月になって、就職の報告に訪ねたときにはお赤飯を炊いてお祝いしてくださいました。

教員になってからも、学生時代ほどではありませんが、おばちゃんを訪ねて出かけました。泊まりではなく、挨拶だけですぐに京都駅に戻ったということもありました。ある年の夏休みに、京都市内の会館で道徳教育の全国大会があったときには、三日間、通うには不便でしたが大原に泊まって全日参加しました。結婚するときには、相手を連れておばちゃんに会いに出かけました。このときも喜んでくれました。「長谷さんのいいところは人を大切にすることですよ」と妻になる予定の相手におっしゃったそうです。両親もこの家にご厄介になりました。私の恩師も泊まっていただきました。何となく親戚が京都にできたような思いでした。

そのうち「あのなぁ、民宿を始めようと思うんだけど、どうかね」と相談を受けたこともありました。そのときには、家も改築し部屋数も多くなっていましたし、ずいぶんと人を泊めてもいましたので「やってみたら。東京から泊まる人を紹介するよ」などと話をしました。その三年後に民宿として正式にスタートを切りました。その後も何回か訪ね、私だけで泊まったり家族連れで泊まったりしました。仲間を連れて泊まりに行ったこともありました。

四〇歳代、仕事が忙しくなってきました。そうそう京都へ出かけて行けなくなりました。時候の挨拶をするだけの年も出てきたりしました。そうこうするうちに、今から数年前の十二月に「喪中につき・・・」という知らせが京都から届きました。おばちゃんが亡くなったとの知らせでした。なぜか哀しさがこみ上げてきて、涙が止まらなかったことを覚えています。若い頃にお世話になったいろいろなことが思い出されました。人と人とのかかわりを大切にされていたおばちゃんから多くのことを学びました。先生になったことを自分の息子のように喜んでくださいました。何か人生がぷつんと切れたような気がしました。去年の春、やっとおばちゃんのお墓参りが、息子さんの案内でできました。大原の里は雨でした。

旅をして様々な土地に出かけ、いろいろな人と出会い、いろいろなことを学び、感じ、思いを抱くことができました。旅は、人間を大きくするものだと思います。特に、人とのかかわりの中で、心が大きく、豊かになっていくように思っています。これからも新たな出会いを求めて旅を積み重ねていこうと思っています。

（児童学科　教授）

本の周辺

「在宅療養をささえるすべての人へ」

松田　正己

本書は、筆者が母の介護をしていた2003－2007年の最後の時期にとりまとめを依頼され、執筆や編集の責任者として関与し、母のなくなった後に完成したものです。在宅療養に関わった家族として自身のいろいろな思いが込められています。

一般向けに病気の知識をまとめたものや、専門家向けの在宅医療のテキストはありますが、実際に、在宅療養をする場合に頼りとなる家族のために書かれたものは意外と少なく、また、書かれている介護のあるべき姿が、実際とはかけ離れていたり、現実の介護の問題を指摘するだけで改善策につながらないと感じていました。高齢者のケア（数年の長期にわたる）とガンの療養（終末期は月単位）とでは、療養生活の課題が基本は同じでも実際は異なったり、支える側も核家族で家族構成も少ない人が増えています。

執筆者には、がん・高齢者・認知症・神経難病・障害児等の在宅療養について専門の医師や開業医と保健・福祉・介護・看護の専門家に、また末期のスピリチュアルケアを宗教家（仏教、キリスト教）に、在宅療養の現場を分かりやすく説明していただくとともに、実際に介護がうまくいった家族と、そうでない家族にも書いてもらいました。

当時の私の介護体験は健康福祉政策を考える原点となっています。母の体調が悪くなった2006年に、国の社会保障の構造改革が始まりました。介護保険の改正、療養病床廃止、診療報酬・入院基本料の改定等の医療改革、介護難民が話題に。我が家も例外ではありませんでした。母が住んでいる地域の介護担当から突然に、生活援助を打ち切るとの連絡。それまで16年間、平日は職場・静岡にいて、母は一人で東京という生活のため、介護保険のヘルパーさんが、中途失明の母の生活にとって命綱でした。その生活援助サービスを介護保険法の改正（これは「切り捨て」ですね、やはり）のため、打ち切るというのです。朝、通勤前に路上で携帯電話から区の担当に電話して、何とかならないのか、と大きな声を思わず出していたのを覚えています。何度も電話して交渉する中でサービスの継続が認められました。声を出せる人はまだよいのでしょう。他の地域には介護保険でレンタルの電動ベットを取り上げられ、泣いている老人がいるとのこと。またいつ、サービスを削減されるかもしれないと恐れ、遅れていた介護認定を上げる手続きに入り、１年半にわたる、私と母の最も苦しい介護生活が始まりました。

（財）在宅医療助成
勇美記念財団監修
健康と良い友だち社 2009年

在宅ケアは導入期から始まり、支援チームの形成期、在宅での生を支える療養期、死別期、悲嘆期というステージがあります。私の母の場合、４年間は、心不全、腎不全、脳梗塞、左麻痺、大腿骨頸部骨折、認知症と病状がめまぐるしく変化し、医療と福祉のケアの体制を組み直そうとすると、制度改革というハードルに足をとられ、死別後も4年間は悲嘆の中にありました。悲嘆期の困難点は、それまであった在宅ケア（あるいは病院内ケア）の支援チームが突然、いなくなり、介護者が心理的に一人になることです。その悲嘆を癒してくれる人々についても考えていかねばなりません。

病院から「家に帰りたい」「家に帰したい」「家で過ごしたい」と思っているのなら、その思いを言葉にして、家族や友人、信頼できる知人やご近所さん、病院の医師や看護師さんに、勇気を出して自分の思いを伝えてみましょう。あなたの思いをサポートする方法は必ず見つかります。

（健康栄養学科　教授）

日本橋美人博覧会に協賛参加のお話

有泉　治

平成二三年四月に、現代家政学科と、健康栄養学科が、千代田三番町キャンパスに移転しました。従来から町田キャンパスでは、地域と連携する活動が積極的に進められ、千代田三番町への移転に合わせ千代田区周辺との地域連携が望まれました。附属図書館としては、三番町図書館の千代田区地域公開が、平成二三年度の目標となっておりました。

平成二三年三月、地域公開の検討がまだスタートする前に、中央区の地域振興活動の一つである、日本橋美人博覧会に参加の要請が持ち上り千代田三番町キャンパス移転をピーアールする良いチャンスと捕らえ、小瀬生活文化博物館長を委員長とする、企画実行委員会で、大江文庫の錦絵や資料、大江文庫資料の再現料理標本などの展示会を、三番町キャンパスをサテライト会場として協賛参加する計画を立案しました。

当初三台の小型展示ケースによる展示会の企画でしたが、三番町キャンパス玄関ロビーのスペースが広く展示ケースを五台に増やし、「江戸文化の彩り」のテーマの展示とし、関原元図書館事務部長のご尽力で、先生方のご協力いただき、講演会の同時開催に計画を拡大しました。

期間は町田キャンパスで開催される学園祭前の約二週間で、準備が重なり大変でしたが、文化の日を挟む良いタイミングとなりました。

展示は十月二一日～十一月五日迄

大江文庫所蔵の錦絵、江戸期の染め資料と、大江文庫の料理書の中から再現した江戸料理の復元標本、和更紗、髪飾り、木地玩具など、生活文化博物館の資料を展示しました。

喜多川歌麿や国貞、国芳の浮世絵は江戸時代の高名な浮世絵師の作品で江戸時代の女性と生活文化を良く表した作品が選ばれました。

大江文庫には、江戸時代の食生活や、女性の立場や役割などを記述した、まさに家政学・生活学・生活文化を学ぶために貴重な資料が収蔵されており、展示を通して、千代田三番町キャンパスの本学教職員の皆さんと、展示期間中に訪問された本学関係者の皆さんに、歴史的な資料の背景に基づいた教育がなされていることを理解いただく良い機会となりました。

講演は十月二九日（土）に開催

十時三十分　江原名誉教授
江戸の食と再現料理
江戸エコ行楽重

十三時
藤居生活デザイン学科教授
染め・今昔―天然染料の色合い

どちらの講演も約八十名の方々が熱心に受講され、大変充実した講演会となりました。

関連ページ「大学美人博覧会」検索

大江文庫の貴重書類は町田本館にある貴重書庫に厳重に保管されています。NHKの番組など、テレビ放送に登場したり、時々他大学の先生方や学生が収蔵書情報を検索して本学図書館で利用されることもあります。当然、本学の授業にも活用されています。

江戸時代の古文書は長時間蛍光灯や日光に当たると焼けてしまい、扱いに注意が必要です。今回の展示では、ガラス展示ケースの中に保存し通常はケースの蛍光灯は消して展示いたしました。約2週間の展示で、日光に当たらぬよう日避けの作業も大変でした。生活文化博物館の資料も博物館で展示する期間を除いては日焼けやカビや虫がつかぬよう工夫して保管されています。髪飾りは、高価な造り物で、芸術的な作品です。値打ちの分かる方には、欲しくなる品物だったと思います。

昼食に江戸再現料理を

江原名誉教授が楠公レストハウスと協力され作られた、江戸時代の再現料理「江戸エコ行楽重」をお弁当希望者に取寄せ八十五名の方が色鮮やかな再現料理を召し上がりました。講演とは別の賑わいで、皆様楽しいひと時となりました。

例年行っているKVA祭の大江文庫展示は、今年度はお休みとさせていただきました。

附属図書館には大江文庫原本と、一部資料は複製本や翻刻本があり、気軽にお読みいただけます（古い文字で難解ですが）、翻刻本は貸出し出来ません。五十年以上前から先輩方が集められた、江戸・明治・大正・昭和初期迄の家政学の研究に役立つ資料が多くの方に知られ、活用されることを祈っております。

（学術情報グループ課長）

熱心に観察・思い出話

歌麿の錦絵

江戸エコ行楽重の昼食

本の周辺

『マイ・フェア・レディ』とKVA精神

畝部典子

映画『マイ・フェア・レディ』（1964）は、オードリー・ヘップバーン主演のミュージカル作品です。劇中歌の「踊り明かそう」や「君住む街で」などは、誰でも一度は聞いたことがあるはずです。

この作品は、イギリスの劇作家バーナード・ショウ（1856−1950）の戯曲『ピグマリオン』が原作です。ミュージカル『マイ・フェア・レディ』として1956年にブロードウェイで初演され、主演のイライザはジュリー・アンドリュースが演じました。舞台の人気を受けてミュージカルが映画化されました。

しばしば『マイ・フェア・レディ』は「下層階級の女性が一人の男性によって貴婦人に生まれ変わるシンデレラストーリー」と表現されますが、これは大きな勘違いです。実は、『マイ・フェア・レディ』は東京家政学院大学のモットーであるKVA精神を見事に体現した作品なのです。

花売り娘のイライザはフラワー・ショップで花を売るレディになりたいと、音声学者のヒギンズ教授に発音を矯正してもらうことにしました。イギリスは階級社会であり、発音がその人のいるべき階級を明らかにします。フラワー・ショップで花を売るレディとは、すなわち上流階級の人々を相手にする職業であり、この時のイライザには全く手の届かないものだったのです。

イライザは身なりも言葉遣いも下品そのものでしたが、ヒギンズは友人のピカリング大佐に「6ヶ月でこの汚らしい娘を貴婦人にしてみせる」と賭けを持ちかけます。ヒギンズの厳しい特訓の結果、イライザは正しい発音だけでなく知識、教養、マナーも身につけ、立派なレディに成長しました。大使館での舞踏会でデビューしたイライザは人々の注目を浴び「ハンガリーの王家の血を引く高貴な女性」とまで噂されました。

ここまでの展開から「シンデレラストーリー」と誤解されるのですが、物語のハイライトはここからです。

舞踏会での成功でヒギンズは「賭けに勝った」とご満悦ですが、イライザは家出をしてしまいます。イライザの家出に動揺したヒギンズは母親のミセス・ヒギンズのもとを訪れると、なんとイライザがそこにいます。イライザはヒギンズが彼女を人間として尊重しなかったことが耐えられない、と訴えます。さらに「ピカリング大佐の前で私がレディでいられたのは、大佐が私をレディとして扱ってくれたからだ。教授はいつまでたっても私を花売り娘としか扱ってくれなかった」と言いました。そして「もう私はあなた（ヒギンズ教授）なしでもやっていける。あなたがすべてだと思っていた私が馬鹿だった。身につけた音声学を教えて自立します」と高らかに宣言したのです。

イライザはこの時すでに、自己アイデンティティを持つ、自立した大人の女性に成長していたのです。ヒギンズに叩き込まれた知識、教養、正しい発音が、彼女を人間として大きく成長させました。これは本学のKVA精神のK（知）とA（技）に相当します。つまり、KAを身につけることで人間は大きく成長し、他人に依存しない生き方を選択できることを示しています。

レディと花売り娘の違いは、どう振る舞うかではなくどう扱われるかであるという彼女の主張は、相手に対する敬意の大切さを物語っています。これはまさにKVA精神のV（徳）に含まれることではないでしょうか。

『マイ・フェア・レディ』という作品は、知識（K）や技能（A）が私たちを成長させてくれることを示すと同時に、それだけで頭でっかちになってはならないことも戒めてくれているのです。知識と技能に徳性（V）が備わって初めて一人の人間として完成するのです。　（児童学科 教授）

参考文献 ――――――
My Fair Lady (1999) Warner Home Video (DVD)
Pygmalion and My Fair Lady, 50th Anniversary edition (2006) Signet Classics
大江麻里子（2005）『マイ・フェア・レディーズ　バーナード・ショーの飼い慣らされないヒロインたち』慧文社

本学教員寄贈著書紹介

平成23年に寄贈を受けた本学教員の著作等を紹介します。ご寄贈いただきましてありがとうございました。今後も著作物出版の折にはご寄贈いただければ幸いです。

天野正子
In Pursuit of the Seikatsusha　Trans Pacific Press　2011

井上眞弓
狭衣物語：空間 / 移動　翰林書房　2011

江原絢子
おいしい江戸ごはん　コモンズ　2011

酒井治子
保育所食育実践集　5　日本保育協会 2011 ほか

西海賢二
東日本の山岳信仰と講集団　岩田書院　2011
古橋家文書目録　第三集ほか　論文多数

吉川晴美
人間関係：かかわりあい・育ちあい－新訂　不昧堂出版　2010

すれば、徴兵制は、「労役課税」を納税する義務を果たすことであり、軍役を経験しはじめて一人前の納税義務を果した男性社会人となるのだから、当たり前のことである。しかし、去り行き際に、学生が言い残して行ったかすかな声が忘れられない。

「彼女は、待っていてくれるかな？」

大学もまた「ミニ社会」である。

ネパール、ベトナム、中国、インド・・・数カ国の留学生とキャンパスライフを共にして、生活者の目線から国際社会がよく見えてくる。またそこから日本がよく見える。キャンパスは、様々な母国の事情を背負って自己研鑽に励んでいる青年たちの、世相を映す人生曼陀羅である。

今頃は38度線下で軍役に賦しているあの学生の軍靴にも、桜は吹雪いているだろうか。

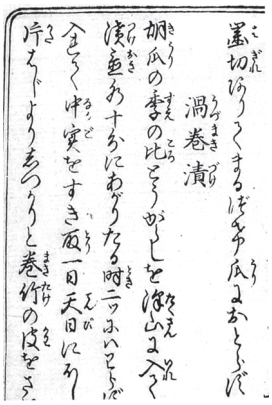
（現代家政学科　教授）

大江文庫資料の利用について

「月刊やさい通信」

ＮＨＫ総合で毎月末に放映されている「月刊やさい通信」に大江文庫資料が利用された。

2011年６月にはキュウリについての放映があり、江戸時代の料理書「四季漬物塩嘉言」を基にテレビ局が当時の漬物である「渦巻漬」を再現した。また本学の江原名誉教授も出演され、日本でのキュウリの歴史や江戸時代の使われ方などのお話があった。


渦巻漬のレシピ

10月にはカボチャについて放映があり、明治の料理書「手軽西洋料理法」を基にテレビ局が、勝海舟が食べたと思われるカボチャのパイを再現した。

どちらも大江文庫で所蔵している資料が使用され、そ記述を基に再現料理を作成している。

撮影では、図書館内や書庫、資料を様々な角度から撮っていた。更に後日、足りない部分の追加撮影をするなど、実際の放映では短い時間に編集されていたが、その何倍もの量の撮影を行なっており、ＴＶ番組の裏側、大変さを垣間見た気がした。

手軽西洋料理法

このように大江文庫では様々な料理書を所蔵しており、テレビ局や出版社、研究者等に利用されている。今回のようにＴＶ放映されることもあるので、図書館から広報を行うので、興味のある方は是非ご覧いただきたい。

「卒業式に見る人生曼陀羅」

小野塚　久枝

一般に、年明けには、二種類がある。

一つは、「明けましておめでとうございます。本年もよろしく」とあいさつを交わし、カレンダーを新たに貼りかえる年明けである。もう一つは、カレンダーを一枚めくるだけの、社会的な活動に区切りをつける「年度」の年明けである。

電車の中は、ミニ社会。

年明けをよく反映するミニ社会の空間である。「年度の区切り」の３月は、卒業式に向かうはかま姿の女子大生グループに乗り合わせる。華やかな車内にはどことなくいい香りが漂ってきて、はずむ会話の方向に視線が引き寄せられてしまう。そして、カレンダーを一枚めくり４月に入ると車内は一転する。真っ白いワイシャツが初々しく、新入社員たちが乗ってくる。緊張した面持ちの車内は皆が無口になっている。わずか数日前は、車内をにぎわしていたあの青年たちの、出勤第１日目の社会人への巣立ちの朝である。年度の区切りは、それぞれの人生史のスタートである。

女子大の卒業式の日。桜が吹雪はじめたキャンパスにさわやかにアナウンスが流れてくる。

「ご家族の方にご案内申し上げます。・・・・・」

「へ～ェ？　なんで『家族』なの？」と思うが、最近は「ご父兄」や「保護者」という言葉は使わない。キャンパスの隅々を見わして、「なるほ～ど」納得した。卒業生１人に、２～３人の付き添が参列する卒業式のキャンパスは「ご家族」が似合っている。会社を休んで来たであろう父母、卒業生の姉たち・祖父母たち。少子化時代の卒業式は、家族みんなの行事なのだ。さらに、その他に自主的に式場に入らない付き添いがいる。式が終わるのを校庭で待っているボーイフレンドらしい男性たちである。そしてさらに、その男の集団からやや離れた桜の吹雪く木陰に、乳母車が見える。卒業生という母親を待っている若いパパと赤ちゃんである。

「なるほど。これでは保護者といっても、誰なのかわからないッ～。」

学生時代に妊娠・出産することが珍しくない時代に入ってきた。実業界を経験してから大学に入ってきた学生もいれば、何かの方法で日本国籍が欲しい留学生もいるし、早く子供を産んでおきたい人生計画の学生もいるだろう。彼女たちは、夫も義母も実母からも、周辺の理解と協力を全身に受けて、「ママは学生」をやり切って、今日の日を迎えることができたのである。少子化の歯止めに貢献しながら、自分の夢に向かって独立自尊の自己開発に努める女性たちなのである。

一方、卒業式に出たくても出られない学生がいる。彼らが、級友と一緒に卒業祝いで人生を区切れない理由は、彼ら自身にあるのではない。ある者は出身国の徴兵制度によって、ある者は深刻な経済不況など社会的事情が家庭に押し寄せているケースである。

ある日、男子系大学で講義を終えたとき、一人の学生がニコニコしながら、教壇の私のところにやって来た。

「先生！　年末に、徴兵検査を受けるので帰国しなければならないと相談した者です。おかげさまで甲種合格しました。卒業試験にも間に合って日本に戻れました。試験が済んだら、すぐに帰国して２年間の兵役に入ります。卒業式にはでられません。」

「兵役ッテ？　どこでどんな仕事をするの？」

「僕は韓国人ですので、38度線に行って・・・・。訓練を受ければ、眠りながら夜間歩行ができるようになります。・・・」

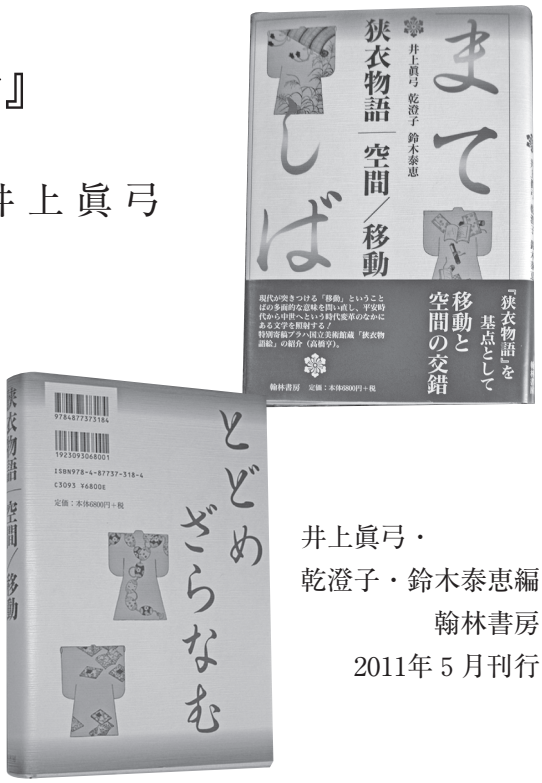
「兵役がすんだら、社会で思いっきり活躍してください。くれぐれもお元気で。」

彼らにとって、卒業は兵役義務延期の期限切れの日なのである。授業で講義している財政・租税政策的に表現

資料の紹介

『狭衣物語　空間／移動』

井上眞弓



井上眞弓・
乾澄子・鈴木泰恵編
翰林書房
2011年５月刊行

『狭衣物語』とは、源氏物語以降の物語で、白河朝あたりに成立したと考えられる王朝物語である。今回紹介する資料は、その『狭衣物語』を中心とした平安後期物語文学の研究論文集で、書名に「空間／移動」とある。平安後期という時代の、王朝文化を色濃く揺曳しつつも中世に突入してゆく時代変革の動きを文学を通して捕まえることを目的として編集された。結果として論集のなかには、さまざまな移動とその移動したことによって生じる空間の意味を明らかにする論文が入集され、平安文学を「移動と空間の交錯する文学」として考える視座を提示している。

しかしながら、移動は多面的・多義的なことばである。時代や地域によってその意味するところを変換してきてもいるだろう。2011年３月の東日本大震災後、移動ということばがいかに社会とリンクしたことばであるか、身にしみて感じられたものである。この本には、平安時代の文学を通して現代に生きるわたくしたちにとっての移動や空間の意味を再検証すべく編んだという側面があることを紹介しておきたい。はしがきにも同様のことが書かれているが、文学は現実より先鋭的に世界を語り、世界を解釈する。

現実の問題として、本学で授業をしていると、平安後期物語が語る、誰ともつながれない孤独やこころが通じていないかもしれない不安、わかり合えないもどかしさや切なさは、現代の女子大生には生々しい現実の問題であり、不条理を生きざるを得ない人間の絶対的孤独の問題を平安後期物語の登場人物たちと共有できるらしいことがわかってくる。動きたくなくても何か大きな力によって移動させられてしまうディアスポラな状況は世界レベルの問題として現代社会が抱えているものだが、平安後期物語にも「転地（ディスプレイメント）」が見いだされ、これにもまた学生は反応しているのであるから、仮定の話ながら、本書を読むことを通してさらに思索を深め、生き方に対し慮る可能性があるやもしれないと密かに思ってみたりする。また、本書の中には、新出のプラハ国立美術館蔵「狭衣物語貼交屏風」のカラー写真と研究も入集されている。この屏風が日本を出国して辿った移動を想像しながら、平安後期物語の世界へタイムトリップすることもできようか。

装丁は林佳恵氏が担当し、江戸時代のきものデザイン画ともいうべき雛形をあしらい、また狭衣物語のなかで詠まれた和歌「まてしばし山の端めぐる月だにもうき世にひとりとどめざらなむ」をタイポグラフィーとして使っていただいた。きもののデザイナーでもある林さんによると、装丁とは本にきものを着せることであると言う。東京家政学院大学附属図書館では、最近、表紙も残して配架してくれるようになった。書籍は内容が読まれ、調査・研究・批評に供されるものだが、本の内容を表象する表紙や見返し、扉などの意匠も、書籍文化を担っている。図書館が文化資料蓄積の場として表紙デザインも保全する方針を選択していることは喜ばしい。林さん渾身のデザインであるこの本と、さらに第一論文集である『狭衣物語が拓く言語文化の世界』の表紙も是非見ていただきたい。しおりと背表紙のはしがみが同じで、二つの本の体裁を統一してくれていることがわかるだろう。

また、本学の大江文庫には江戸時代の雛形がたくさん架蔵されているので、興味のある方は、まず図書館を訪れて閲覧してみてはいかがであろうか。

（現代家政学科 教授）